

3. 審査講評 小泉浩郎審査委員長・地産地消推進活動支援委員会委員長

ご紹介いただきました、今回の表彰事業の審査委員長を務めました小泉でございます。審査過程をご報告申し上げます。今回のこの表彰事業は第4回目です。全国から29点の応募がありました。書類審査、それから必要な事例につきましては、審査員がそれぞれ分担をして現地におうかがいし、お話をうかがいました。またその後、2回審査委員会を開きまして、今回の表彰されます皆さんの候補を決定したわけでありまして、それを先ほど会長のほうからお話がありましたように全国協議会のほうにご報告いたしまして決定したという経過です。

各賞それぞれにつきまして簡単にコメントをさせていただきます。農林大臣賞および特別賞につきましては、このあとそれぞれ現地の皆さんが直接皆さんにご報告申し上げますので、この2つの賞については簡単に申しあげますが、その他、各局長賞、特に私が感じた点を申し上げたいと思います。具体的な活動の内容は皆さんにお配りしてあります冊子の1ページからございますので、どうぞそちらのほうに目を通しながらお聞きいただければと思います。

最初に農林水産大臣賞、「株式会社げんきの郷」でございます。JAの子会社でして、直売所それから加工、レストラン、農業体験それから各種イベントとうとうからなる総合的な経営をすすめております。正社員だけで45名おりますし、それからパートの方が187名、生産者が727名、ある意味一大企業といってもよろしいかと思っております。そういうことで農工商一体の地産地消の先駆的事例ということで表彰させていただきました。

つづきまして農林水産大臣賞、「有限会社有朋の里泗水」でございます。ここは市が51%出資による第三セクターでして、生産、加工、販売、給食、観光、交流と地域地産地消活動を通じて地域活性化を課題としております。驚きでしたが、地産地消関連のここが主催をして市民運動会も開催しているといったような活動をされているところです。環境にやさしい農業として減農薬あるいは環境にやさしい資材の補助、土壌分析の支援、それから生産者全員をエコファーマーに認定するということで、生産者の皆さんが安全で安心でそして信頼できる農産物の生産にかかわっております。

特別賞、「株式会社JAシンセラ」でございますが、ここはJAの子会社でして、惣菜部、仕出し部それから農産物の直売所を中心とした地産地消を運営しております。職員が112名です。そのうち地産地消関連が45名、農家の皆さんは470人、本年も11名新採用をしたということです。特にここまで職員の数であるとか、農家の皆さんの数を数え上げてみましたが、今世間は未曾有の経済危機といわれるようなかたちで、なかなか働く場がないというときに、この農業農村、そこでの地産地消活動の中では、ひとびとが生き生きと働いている。たくさん地域の人たちを雇用できる力を持っている。今まで地域の中で潜在的なかたちでございましたおじいちゃん、おばあちゃんも昔の技術を思い出し、現在に生かしているということを少し強調したかったために申しあげました。

それから特別賞、「農業法人株式会社神子の里」であります。ここはよくいわ

れるところの限界集落と、誰がつけたのか知りませんが現場にとっては大変迷惑な言葉だろうとは思いますが、そういう限界集落と呼ばれるところの神子原地区の生産者131名からなる農業法人です。消費者を裏切らない本物の食材生産による直売加工、それからそばの食堂等を経営しております。農村のよさを発信し、そして多くの土地の人たちを呼び込み、各種オーナー制度、空き家農家、農地の情報バンク等々により、定住促進をすすめておりますし、首都圏の学生たちも受け入れております。それには市行政の多大な支援があるということです。

つづきまして総合食料局長賞、「相馬地方調理師会」、学校、病院、それから福祉施設、飲食店等に勤務する約700名の調理師の皆さんの集まりです。首都圏に近い相馬地方では、有名な産地というところは、ほとんどそこで生産されたものは、中央卸売市場に流れてしましまして、地元のスーパーには県外のものしかないということで、これはおかしいんじゃないかということに疑問を持った皆さんが、地元の食材を使い、それから地元のこれまでの食文化を掘り起こし、そしてそれをそれぞれの店の中で使おうじゃないかということで立ち上がった皆さんです。郷土料理の勉強会や地元食材を活用した料理コンクール等々を行い、またそれはレシピ集として発行をしております。地産地消というと農業生産側からの呼びかけのようですが、実は生産者以外の皆さんも地産地消ということに強い気持ちを持っておられるということでもあります。

農村振興局長賞の「有限会社紅小町の郷」、道の駅くりもとの中に紅小町の里というのがありまして、生産者202名、関係団体30で構成されております。

私はここへはうかがっていなかったのですが、道の駅ですから国道沿いの立派な施設があるのだらうと思いますが、近くに名所旧跡があるわけではない、それから町から遠いというような立地条件の中で、地産地消をどう考えるかということです。ここは千葉県ですからサツマイモが有名です。そのサツマイモの中でも紅小町というサツマイモをシンボルとしまして、直売所はもとよりレストラン、貸し農園、体験農園、それからクラインガルテン等を一体的に整備いたしまして、お客さんが立ち寄って、ただ買って帰るということだけではなくて、お客さんに来ていただいて、そして滞在をしてもらうという考え方の中で地産地消を位置づけ成功しているところです。例えばザリガニ園だとかカブトムシ園だとかニジマスの釣り堀等も整備していると聞きました。

次は生産局長賞、「三重四日市農業協同組合」、ここはJA直営の直売所で管内に8店舗営業しています。それぞれJA職員を配置して490人の生産者の荷を扱っています。これまで地産地消、特に直売所ということになりますと、この農家が自分で値段をつけ、そして直接消費者に販売するというやり方がありますから、どうも今まではJAの一括集荷、市場への共同出荷というような方法には相容れないものがあつたわけです。しかしJA四日市は直売所を、つくったものを売るという施設ではなく、日々の食材を買いに来てくれる店として整備して、消費者を主点におく直売所づくりに心がけ、しかもその生産の担い手は、できるだけ専業農家を育てていこうという考えの中で展開している事例です。

生産局長賞の「JA三次アンテナショップ生産連絡協議会」、これは生産者約

1,000名余による都市部への直売事業をすすめております。人口6万人程度の市内の直売所では、すでに直売所は競合状態にあるようです。そこで70km離れた県内最大の消費地、広島市にアンテナショップと13のインショップを展開しています。一昨年のここでの受賞集団であります。奥伊豆直売生産協議会という奥伊豆をこの場で表彰しておりますが、その奥伊豆も中山間、都市から遠いところなのです。そこで皆さんがお話していたことは、地産都消とっていました。つまり土地で生産したものを都消、都に行き商売をすることで、この考え方の中で地産地消を位置づけております。とにかく地産地消のある枠内で捉えるかたちがありますが、以上申し上げましたようにきわめて多様なかたちで展開しているということです。管内に11か所の集荷所をつくりまして、日に2回集荷をする。そして70km離れた市内に配送をする。そういうように消費者と生産地が離れていますから、地産地消の特徴である顔がみえ話ができる関係はどうしているかということになりますと、年間17回の消費者との交流イベントを行っているという事例です。

以上今回表彰されました各集団の皆さんの私の私見としての特徴を申しました。全体を通しまして重複しますが3点ほど気がついた点を申し上げておきたいと思えます。

その第一は、地産地消が地域活性化の重要な柱になっているということです。先ほど申し上げましたように、地産地消というと多くの皆さんは、農産物直売所を思い出し、お母さんやお年寄りのささやかな活動というふうに見る向きもあります。それから先ほど申し上げましたように、JAや大規模産地は主産地形成、共選共販、市場流通、そういう流れの足を引っ張るというような批判もかつてはありました。しかし今申しあげましたように、最近では市町村やJAが地域活性化の重要な柱として地産地消を位置づけているということです。今回も応募された中に多くの成功事例をみることができました。今日お集まりの皆さんの中にも市町村関係、JA関係の皆さんもおいででしょうから、ぜひ地産地消の仕掛け人になっていただきたい。村のひとびとはその仕掛けを待っているということでごす。

それから第二は、農業以外の経験や能力が大きな力になっているということです。農業生産は第一次産業ですが、地産地消は二次産業それから三次産業を取り込みながら発展をしている。特に農業生産部門では不得意だった加工、販売、営業、そういう領域の中で、多くの事例はかつて他産業に従事されていたかたがた、あるいは兼業農家として兼業先ではそれぞれ専門家として腕を磨いていたかたがた、こういうかたがたが地産地消の活動の中で率先的に重要な役割を果たしております。そこには風土の食材や食文化を大事にしようという、そういう共通の考え方があるように思えます。

それから第三は、この種の会議にまいりますと、だいたい冒頭は我が国農業農村は厳しいというそういう挨拶からはじまるわけですが、地産地消の現場にうかがいますと、だから農業はだめだというような諦めを聞くことはほとんどありません。農地が狭い、町から遠い、若者がいない、だからだめだと、先ほど申し上げましたように、最近の学者先生はそういう集落を限界集落などといって語られています。町から遠ければ先ほどのように70kmも離れた都市の

中にインショップ、アンテナショップをつくる。あるいは限界集落と呼ばれるような山の中であれば、その山の中の食文化や村の習俗あるいは田園風景等も掘り起こし、自然豊かな農村に町のひとびとを呼び込めばいいのだろうと思います。そんなことで今回も現地にもおうかがいし、それから推薦調書等も読ませていただき、まだまだ農業が元気だ、とくに地産地消が元気だということを実感させ多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。